



Interview

## 山本 廣志さん

# 捕虜となった私を待っていたのは過酷すぎる現実でした

昭和18年に召集され、戦地へと向かった私は、終戦後、ロシア(当時・ソ連)の捕虜となりました。

捕まった直後、兵舎を追われた私たちは、板張りの小屋や野営など何度も移動を繰り返されました。そして、行き着いた「興南(朝鮮民主主義共和国)」。そこである日、「内地(日本国内)に帰れる」と乗せられた船。しかし、それが行き着いた場所は、極寒の地「シベリア」でした。その場にいた誰もが「完全なる捕虜となった」と感じた瞬間でした。そして、「内地へ帰るのではない、だまされるな」船の甲板で見た不吉なその文

**Profile** やまもとひろし・1922年生まれ。昭和18年に召集され戦地へ。終戦後、ロシア(当時・ソ連)の捕虜となる。2年間のシベリア抑留の後、帰国。岩谷在住・92歳。

字が頭の中をよぎりました。

ここでの2年間、鉄道敷設予定地の盛土やロシア人の住居づくりなどさまざまな仕事を与えられました。盛土の作業では、凍りついた大地はコンクリートのように固く、思うように作業を進めることができませんでした。

氷点下50度になったことがあるほどの極寒の地。収容所の部屋の隅に集まり、互いの毛布を集め、暖を取り合って眠る日々。あまりの寒さに朝、壁についた毛布が凍り付いて離れないこともありました。亡くなり凍りついた兵士の死体を見たこともありません。また、この2年間でシャワーを浴びたのはたった1回。トイレは穴を掘ったところで済ませ、汚臭に悩まされることもありました。食事は最低限。そのため森に仕掛けられた熊の罠の肉を取って食べたこともありません。夜盲症になったこともありました。そして、この地で私は、3人の仲間

を失いました。

今でも、一番記憶に残る出来事があります。ある日、同じ作業班全員に告げられた「ダモイ(帰国)」。意気揚々と支度を始めた私に「山本は残れ」突如告げられたその言葉。あまりのショックに「どうして私だけ…」そう詰め寄る私に、ロシアの将校は「実際は帰国ではなく他の収容所へ移されるだけ。お前はやつれて使えないから連れて行かない」と言い放ちました。

当然、鏡なんかいない生活です。自分かどのほどやつれていたのか、このときの私は全く気付いていませんでした。なので、この言葉を信じていることができず、悔しくて悔しくて涙を流したのを覚えています。

同じ作業班の人たちが出發してから間もなく、集められた私たちに告げられた本場の「ダモイ(帰国)」。「やつと帰れる」帰国を告げられた瞬間は、やはり嬉しかったですね。

船で帰国するため、私た

ちは港までの道のりを全員で歩きました。しかしそのうち私は、徐々にみんなに遅れをとるようになりまし

た。やつと林を抜けると、その先に広がっていたシベリア鉄道。その線路をまたぐとしたとき、足が上がらない自分に気が付きました。そこで初めて、自分の体がどれほど弱り切っていたのかを自覚したのです。それと同時に、あの時のロシアの将校の言葉が真実だったことに気が付きました。

そして、「1年で帰れる」そう信じて過ごした抑留の2年間に、終止符が打たれたのです。

「捕虜になったら自ら死ぬ」軍隊教育でそう教えられていた私たち。実際に、捕虜になったときその教えを実行した仲間もいました。それだけ軍隊教育が染みついていたのでしょう。私自身も「捕虜になってしまつた」この事実が、今でも頭に焼き付いて離れません。